

暖温帯に生育する絞め殺しイチジクの結実フェノロジー

大谷達也（森林総合研究所九州支所）

イチジク属の樹木はコバチとの送粉共生を維持するために、年間のどの時期においてもいずれかの個体が結実していなければならない。しかし温帯の場合には、環境条件が季節によって変化するので、低温など悪条件下で結実する場合には資源などの制約がより厳しいと考えられる。暖温帯に生育するイチジクの各個体は、どのように結実の時期を調整して個体群としての周年結実を実現しているのだろうか。これまで約2年半、屋久島西部海岸地域において、74個体のアコウを対象におよそ25日間隔で結実状況を記録してきた。この調査は4年間続ける予定であるが、現時点までの傾向として以下のようなことが挙げられる。

果実をつけている個体の割合を調査時点ごとに算出すると、その平均は31%、最低値は10%であり、花粉媒介のシステムから予想されるとおり、年間のいずれの時期にも結実個体が存在することが明らかとなった。結実個体の割合に明瞭な季節変化はみられなかったが、新葉が展開するときには果実の量が少ない傾向がみられた。個体のサイズと年間の結実回数との間には正の相関が認められ、資源に余裕のある大個体が何度も結実していることがうかがえた。しかしながら、個体サイズが同じような大個体だけを比較しても、結実回数には0.9から3.6回/年とばらつきがあり、結実の周期も規則的なものから不規則なものまでさまざまであった。今後は結実フェノロジーの観察を継続し個体ごとの結実周期を類型化するとともに、種子散布特性との関係、周辺の立地・林分条件の影響について考察していきたい。